

第4章 松戸市の文化財の概要と特徴

本章では、市内に所在する文化財を地区ごとに集計し、その傾向や特色を整理します。

整理に用いる地区分けは、近世以来の地域的なまとまりを継承する 1889(明治22)年の旧行政区をベースとし、これに第2章「松戸の地理的環境と自然」で指摘した地形の3類型による区分を重ねて設定しました。

松戸市内にあった近世の村々は、町村制の施行により小金町、馬橋村、高木村、^{あきら}明村、八柱村、松戸町の6町村に再編されました。当時、これらに含まれていなかった根木内や高柳、あるいは小金などの飛地については、便宜的にそれぞれ隣接する地区に含めています。またこうして新たに設定した地区を、現在でも通用している地域名を用い、小金地区、馬橋地区、高木地区、明地区、東部地区(旧八柱村)、松戸地区と称することにします。さらに第2章の「松戸の地理的環境と自然」で指摘した地形の3類型をこれに重ね、小金・馬橋・明地区の西側低地部分を新松戸・古ヶ崎地区、旧松戸町の南西側を矢切・栗山地区とします。比較的平坦な台地上の地域については、高木地区の栗ヶ沢、金ヶ作、常盤平、小金原に東部地区の松飛台・串崎をあわせた範囲を小金

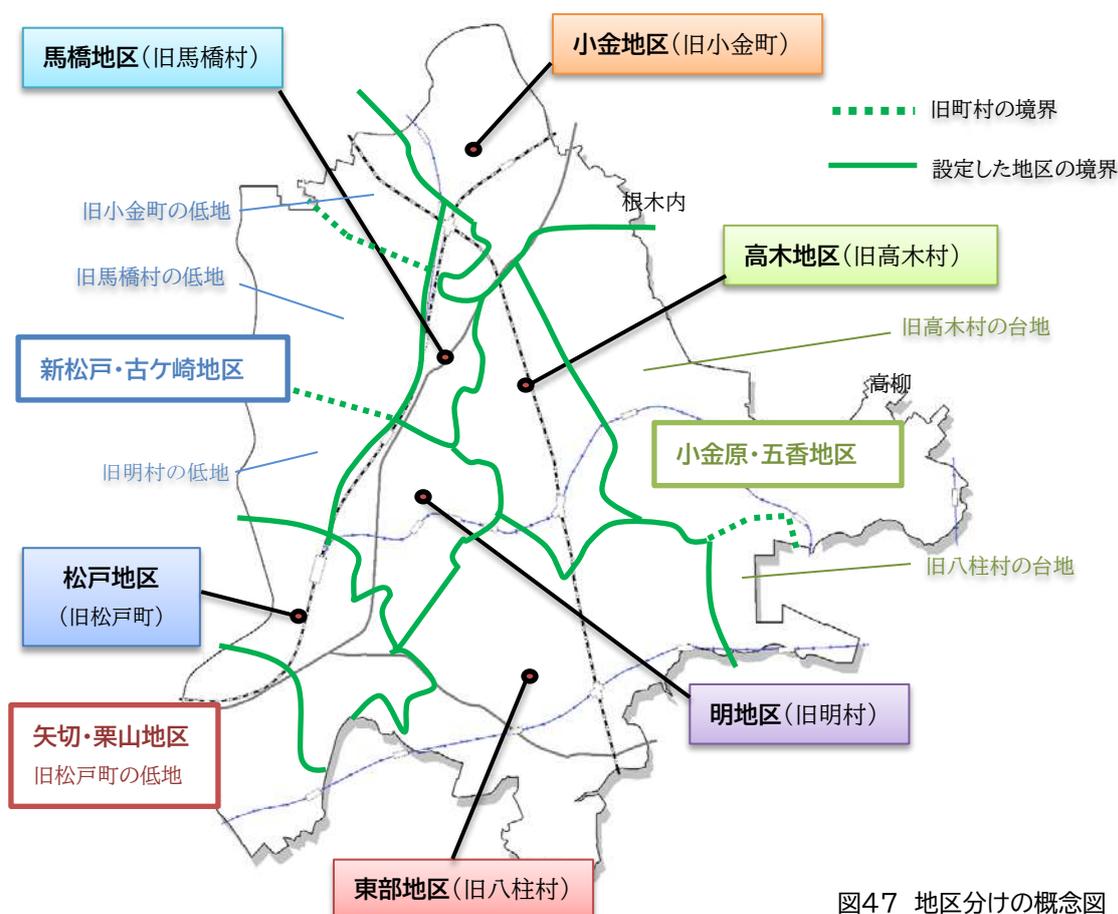


図47 地区分けの概念図

原・五香地区とし、最終的に市内を9地区に分割します(図47)。

第1節 指定等文化財

令和4年度末現在、松戸市には58件の指定文化財と2件の国登録文化財があります。指定区分の内訳は国指定7件、県指定5件、市指定46件。種別毎では建造物14件、美術工芸品29件(絵画3、彫刻6、工芸品4、歴史資料4、古文書9、考古資料3)、無形の民俗文化財2件、記念物13件(遺跡10、名勝1、動物・植物・地質鉱物2)。国登録文化財は建造物が2件、国選定保存技術が1件(歌舞伎^{かつら}製作)です。

表2 指定等文化財の種別と件数

種類・種別		国指定	県指定	市指定	国登録	県登録	国選定	県選定	市選定	合計	
有形文化財	建造物	1	0	13	2	0	-	-	-	16	
	美術工芸品	絵画	0	0	3	0	0	-	-	-	3
		彫刻	1	0	5	0	0	-	-	-	6
		工芸品	1	1	2	0	0	-	-	-	4
		書跡・典籍・古文書等	2	2	5	0	0	-	-	-	9
		歴史資料	0	0	4	0	0	-	-	-	4
		考古資料	1	0	2	0	0	-	-	-	3
無形文化財		0	0	0	0	0	-	-	-	0	
民俗文化財	有形の民俗文化財	0	0	0	0	0	-	-	-	0	
	無形の民俗文化財	0	1	1	0	0	-	-	-	2	
記念物	遺跡	0	0	10	0	0	-	-	-	10	
	名勝地	1	0	0	0	0	-	-	-	1	
	動物・植物・地質鉱物	0	1	1	0	0	-	-	-	2	
文化的景観		-	-	-	-	-	0	0	0	0	
伝統的建造物群		-	-	-	-	-	0	0	0	0	
選定保存技術		-	-	-	-	-	1	0	0	1	
合計		7	5	46	2	0	1	0	0	61	

* 上表は、令和4年度作成の「指定文化財・登録文化財一覧」(資料編所収)を基に集計している。

* 県指定の無形の民俗文化財「松戸の三匹獅子舞」は、上本郷、和名ヶ谷、大橋の3地区、計4か所の神社に伝承されているが、指定件数は1件としている。

指定文化財の「種類・種別」に見る傾向と特徴(表2)

種類・種別毎に見ると、有形文化財の美術工芸品29件が突出しています。このうち古文書は、「^{だいがくさぶろうごしょ}大学三郎御書」など本土寺が所蔵する5件をはじめ、市立博物館が所蔵する2件(「^{にしはらもんじょ}西原文書」^{ぶぜんしもんじょ}「豊前氏文書」)など、最多の9件を数えます。古文書については、鎌倉時代以来の歴史を有する

本土寺の所蔵文書と、小金城主高城氏に関わる文書が中心となっており、松戸市の歴史文化の特徴を反映した結果になっています。

彫刻では、萬満寺所蔵の「木造金剛力士立像」ほか4件と、光明寺の「阿弥陀如来立像」、本福寺の「阿弥陀三尊仏」の計6件の仏像が続きます。また工芸品4件は仏具が主であり、美術工芸品の多くが、歴史ある寺院の所蔵する文化財であることが分かります。

有形文化財の建造物16件では、「一月寺遺石」や「庚申板碑」など石造物が半数近くの7件を数え、年代的には近世が中心です。「旧徳川家松戸定邸」や「柳原水閘」、「松戸中央公園正門門柱（旧陸軍工兵学校正門門柱）」、登録文化財の「旧齋藤家住宅主屋」(図48)など建築物は、近代

以降が主となっています。記念物では、松戸が発祥である「二十世紀梨誕生の地」のほか、「幸田貝塚」、「河原塚1号古墳」と同「4号墳」(図49)、「小金牧五香六実野馬除土手」など、松戸の歴史文化を特徴付ける埋蔵文化財を指定しています。

なおこれまでのところ、本市においては無形文化財、有形民俗文化財、文化的景観、伝統的建造物群についての文化財指定、登録及び選定はありません。

指定文化財が所在する「地区」に見る傾向と特徴(表3・図54)

本土寺(国指定重文3件・県指定3件)と東漸寺(市指定3件)が所在する小金地区には、指定文化財が集中しています。中世の文化財が目立ちますが、なかでも県指定「本土寺過去帳」は、15世紀から17世紀にかけての200年以上にわたる膨大な記録であり、記された人についての情報のほか政治的な出来事についての記事も見られ、関東の中世史研究における重要な史料とし



図48 旧齋藤家住宅主屋(国登録)



図49 河原塚古墳4号墳(市有形)



図50 東漸寺のシダレザクラ(市有形)

て高く評価されています。また東漸寺の天然記念物「シダレザクラ」については、指定に際して実施した DNA 分析の結果から、長野県塩尻市の天然記念物で名前も同じ東漸寺にあるシダレザクラと近親関係にあることが明らかにされています。山号の同じ二つの東漸寺は、ともに経菅愚底上人により開創ないし中興された寺院であり、いずれもシダレザクラが有名です。

馬橋地区では、鎌倉時代の創建になる萬満寺に、運慶作との伝承がある「木造金剛力士立像」や、中国明代の作とされる優美な「鑄造魚籃観音立像」(図51)などが所蔵されており、彫刻(仏像)の4件が特筆されます。



図51 鑄造魚籃観音立像(市有形)

明地区と東部地区は、旧齋藤家住宅や長屋門など農村部の建造物と、廣龍寺の「嘉永五年銘庚申塔」、時宗本福寺の「阿弥陀三尊仏」に「鉦鼓」、4か所の神社に伝承される「三匹獅子舞」など、地域の人々の生活や信仰に関わる文化財が多く見られます。

松戸地区は、国の重要文化財と名勝に指定されている「旧徳川家松戸定邸」と「旧徳川昭武庭園(戸定邸庭園)」のほか、「松龍寺山門」や「松戸神社神楽殿天井絵及び杉戸絵」(図52)など、徳川昭武関係や旧松戸宿内の文化財が中心です。



図52 左:松戸神社神楽殿(平成26年竣工) 右:神楽殿杉戸絵(市有形)

矢切・栗山地区では治水の歴史に関わる「柳原水閘」(図53)が市指定の有形文化財、水道事業に関わる「千葉県水道局栗山配水塔」が国登録有形文化財となっています。いずれも江戸川に関わる近代の建造物であり、地域の歴史を如実に物語る文化財といえます。



図53 柳原水閘(市有形)

これに対し、八ヶ崎や千駄堀などを含む高木地区や、

江戸川沿いの北部の低地にあたる新松戸・古ヶ崎地区、小金牧の範囲内に含まれていたため土地利用の歴史が浅い小金原・五香地区については指定文化財の件数が極端に少ない状況にあります。

表 3 指定等文化財の地域別

種類・種別		小金	馬橋	明	古ヶ崎 新松戸	高木	東部	五香 小金原	松戸	栗山 矢切	合計	
有形	建造物	0	3	2	1	2	2	0	2	4	16	
	美術 工芸品	絵画	1	0	0	0	0	0	1	1	0	3
		彫刻	1	4	1	0	0	0	0	0	0	6
		工芸品	3	0	1	0	0	0	0	0	0	4
		書跡・典籍・ 古文書等	8	1	0	0	0	0	0	0	0	9
		歴史資料	1	1	0	0	0	0	0	2	0	4
		考古資料	1	0	1	0	0	1	0	0	0	3
無形文化財		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
民俗	有形の民俗文化財	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	無形の民俗文化財	0	0	3	0	0	2	0	0	0	5	
記念物	遺跡	5	0	0	0	0	2	1	2	0	10	
	名勝地	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
	動物・植物 ・地質鉱物	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	
文化的景観		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
伝統的建造物群		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
文化財の保存技術		0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
合計		21	9	9	1	2	7	2	9	4	64	

*「松戸の三匹獅子舞」は、東部地区(日枝神社・胡籙神社)と明地区(明治神社・風早神社)で各2か所、「万作踊り」は明地区(本福寺)で1か所とした。そのため合計数は、表 2 の 61 件より3件多くなる。

*「西原文書」「豊前氏古文書」は、小金城主に関連するものとして小金地区にカウントした。

第2節 地区別に把握している文化財

松戸市の市史編纂事業は、市制施行十周年記念事業の一つとして、1954(昭和29)年に始まりました。これに伴い基礎的な史料の調査と整理が進められ、1958(同33)年には『松戸市史料』を刊行しています。その後も、教育委員会が行ってきた調査研究の進展により、多くの知見が蓄



図54 指定文化財・登録文化財の所在地

積されてきています。

表4は、過去の調査を基に作成した文化財の一覧であり、調査報告書や資料目録等が刊行されているものからカウントして作成しました。総計2,367件の内訳は、建造物が1,769件(うち石造物1,705件)、美術工芸品135件、民俗文化財74件、記念物3件です。

埋蔵文化財は、時代別件数をそのまま集計すると386件となりますが、多くの遺跡がいわゆる複合遺跡であり、実際に市内に所在する遺跡数を大幅に上回ります(野馬除土手を1遺跡としてカウントすれば、市内に所在する遺跡数は200か所です。資料編の3-(5)埋蔵文化財参照)。

時代別では縄文時代の遺跡数が154か所と突出しており、しかも貝塚を伴うケースが66例もあります。表4の集計結果を見ても、本市の縄文時代の遺跡が、江戸川沿いの低地や国分谷に面

する台地上に濃密に分布し、その多くに貝塚が形成されていたという状況を指摘することができます。

表 4 把握している文化財(指定等を除く)の地域別一覧

種類・種別		小金	馬橋	明	古 ヶ 崎	新 松 戸	高 木	東 部	五 香	小 金 原	松 戸	栗 山	矢 切	合 計	
有形文化財	建造物	建造物	12	3	1	6	3	23	4	9	3			64	
		石造物	243	127	312	214	173	213	94	204	125			1,705	
	美術 工 芸 品	絵画	2	0	6	0	4	1	1	1	12	4			30
		彫刻	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0			1
		工芸品	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0			3
		書跡・典籍・ 古文書等	25	7	10	7	11	10	4	15	6				95
		歴史資料	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0			3
		考古資料	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0			3
無形文化財		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
民俗文化財	工芸技術	0	0	1	0	0	0	0	0	4	0			5	
	芸能	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0	
	年中行事	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0	
	人生儀礼	2	0	0	2	2	3	0	0	0	0			9	
	村落・家	4	0	0	2	0	4	2	0	0	0			12	
	信仰	11	5	5	7	2	6	4	2	3				45	
	民話・伝承	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0	
	生産・生業	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0			3	
埋蔵文化財	縄文時代	35	3	9	0	22	64	16	4	1				154	
	(上記のうち貝塚)	(16)	(1)	(3)	(0)	(8)	(26)	(9)	(3)	(0)				(66)	
	古墳時代	19	2	10	0	7	21	0	2	3				64	
	中近世城館跡	3	4	2	0	0	0	0	1	0				10	
	野馬除土手	0	0	1	0	0	3	3	1	0				8	
	その他	24	7	15	1	16	66	6	6	9				150	
記念物	遺跡	0	0	0	0	0	0	0	1	0				1	
	名勝地・景観	0	0	0	0	0	0	0	0	1				1	
	動物・植物・地質鉱物	0	0	0	0	0	0	0	1	0				1	
文化的景観		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
伝統的建造物群		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
選定保存技術		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
松戸の歴史文化を特徴付ける広義 の文化財		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計		382	159	378	239	242	416	134	262	155				2,367	

*集計の便宜上、グラフィックデザイン・版画・写真は絵画、陶芸・インテリアは工芸品、資料・その他は歴史資料としてカウントしている。

石造物の1,705件は、昭和60年代に刊行された文化ホールの所在調査を基準として算出した数字です。念仏塔や庚申塔、巡礼塔など、人々の素朴な信仰に由来するものに混じり、少数ではありますが松尾芭蕉(図55)や小林一茶などの句碑も見受けられます。



図55 市内にある芭蕉の句碑:左から本土寺(平賀)、妙典寺(小金)、蘇羽鷹神社(二ツ木)

石造物を除く建造物については、民家調査と旧宿場町建築物調査の成果から、令和3年度末時点で現存する件数を集計しました。現存総数の内訳は、寺院や神社の建造物13件、民家51件です。地区別では東部地区の民家23件が突出しており、小金地区の寺社5件・民家7件、松戸地区の寺社7件・民家2件がこれに続きます。

近世以前の美術品に関する把握調査は未実施ですが、近代以降の千葉大学工学部(旧東京高等工芸学校)関係や松戸に住んだ作家については、これまで精力的に調査研究を進めてきています。図56は、矢切の渡しをテーマとした奥山儀八郎の作品です。1954(昭和29)年から下矢切に住まいを定めた奥山は、野菊の墓文学碑建設に尽力し、また在野の考古学研究者である湯浅喜代治氏が設立した下総史料館の木製看板(図58)の制作も行うなど、地域と深く関わりを持った作家でした。また「原爆の図」で知られる丸木位里・俊夫妻も、1964(昭和39)年から二年ほど市内の八ヶ崎に住んでいました。当時、付近では小金原団地造成に先行する貝の花遺跡の発掘調査が行われており、夫妻は、その調査現場をし



図56 奥山儀八郎
《矢切れの渡し》
昭和30～33年頃
(松戸市教育委員会所蔵)



図57 貝の花公園
貝塚跡記念碑
(制作:本田晶彦)

ばしば見学しています。住まいの近くで採集した縄文土器が、東松山市の「原爆の図丸木美術館」で大切に保管されているほか、発掘調査の様子を描いた『松戸市貝花塚発掘』と題する俊のデッサンも残されています[1965 松戸市教育委員会所蔵]。なお絵画・彫刻・工芸品については、松戸神社が所在する松戸地区が12件と最も多く、千葉大学工学部(旧東京高等工芸学校)のあった岩瀬を含む明地区が10件でこれに続きます(資料編参照)。

書跡・典籍・古文書等は、長い歴史を有する本土寺や東漸寺が所在し、水戸道中の宿場として繁栄した小金地区が25件と最多です。旧村関係の古文書が多く保存されている東部地区・明地区・高木地区、宿場と河岸を中心に栄えた松戸地区、鎌倉時代の創建

になる萬満寺が所在する馬橋地区がこれに続きます。土地利用の歴史が相対的に浅い小金原・五香地区、新松戸・古ヶ崎地区、矢切・栗山地区にも、小金牧や坂川の治水に関わる記録が伝えられており、地域ごとの特色ある歴史を伝えています。

歴史資料は東漸寺所蔵資料(額・雲板^{くもいた}・棟札^{むなふだ})、千葉大学工学部(旧東京工芸学校)関係作品文書資料及びその他資料、考古資料は千葉県立松戸高等学校所蔵資料、王子神社境内出土常滑壺^{とこなめつぼ}、湯浅喜代治考古コレクションの各3件ずつです。



図 58 奥山儀八郎 《下総史料館》 看板
昭和 40～49 年頃(松戸市教育委員会所蔵)

千葉県立松戸高等学校所蔵資料は、1965(昭和40)年、当時の同校社会クラブが行った発掘調査の出土品が主体です(『松戸市史考古資料集2』2008 松戸市立博物館)。これらの出土資料は、2003(平成15)年、同校の施設工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する協議の過程で見出され、教育委員会と県立松戸高等学校の協力により再整理が進められたものです。王子神社境内出土の常滑壺は、神社境内の整地作業中に発見された資料です。常滑産の壺に渥美産^{あつみ}の陶器の蓋^{ふた}、壺内に収められていたカワラケ 2 点と一緒に出土しています(『松戸市立博物館紀要6』1999)。

民俗文化財は、1960 年代に松戸市域で行われた民俗調査の報告である『農村松戸の民俗』(2014 松戸市立博物館)のほか、『伝統的工芸品一覧』(2002 千葉県商工労働部観光コンベンション課)、『千葉県の諸職』(1985 千葉県教育委員会)を基に集計しました。『農村松戸の民俗』にまとめられている調査は、市史編纂事業の一環として行われたもので、事前に、「村落基礎調査」と「村落別講調査」についてアンケート調査を行っています。集計には本文の記述と「村落別講調査」の結果を参考としました。また調査報告書に「農村松戸」のタイトルが付されていますが、松戸や小金などの町場も調査地に選定されており、おおむね松戸市全体を対象として調査は実施されています。その成果は、半世紀以上前、都市化が進行する以前の「古い松戸」の民俗を記録した貴重な資料です。

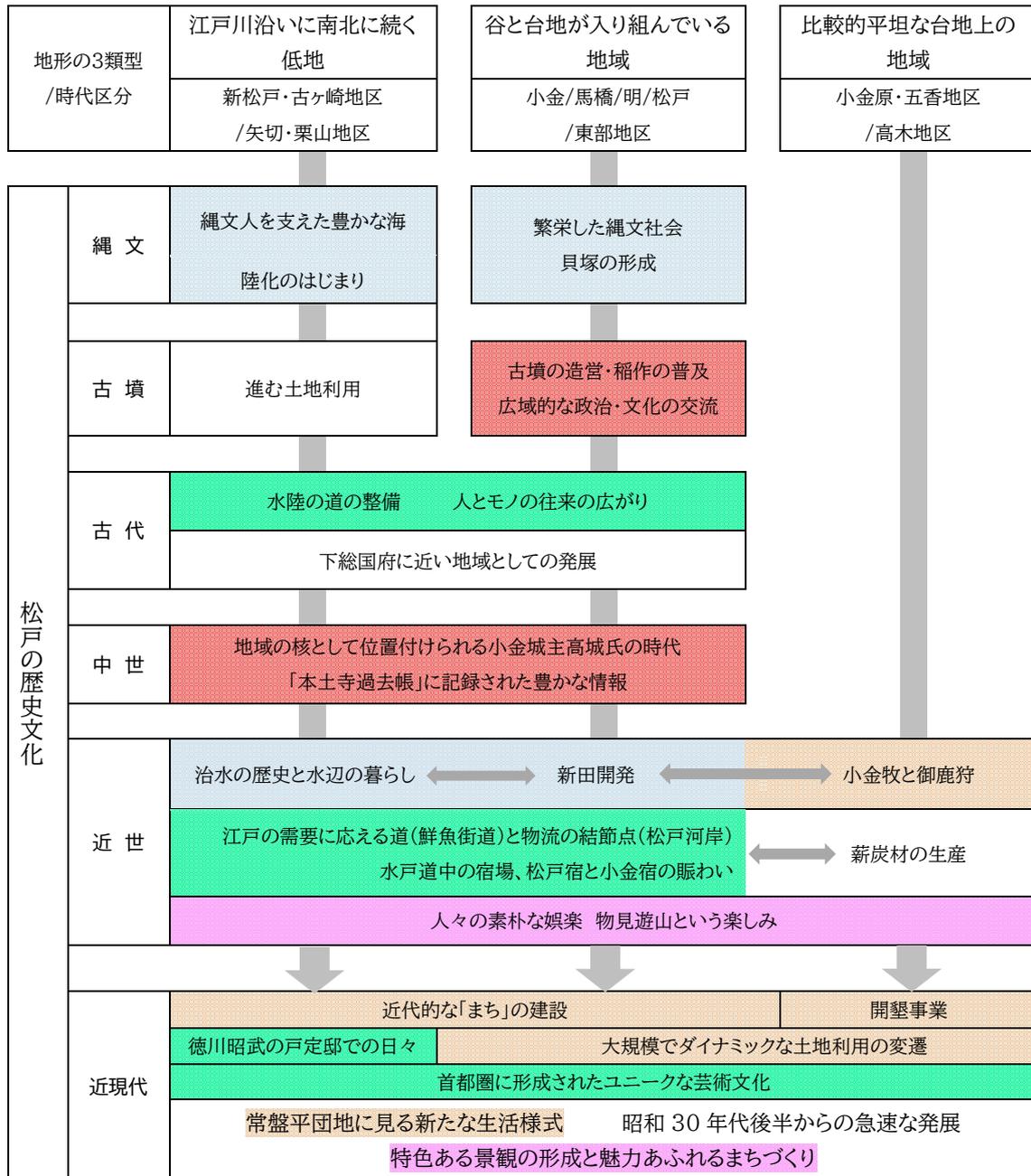
記念物は、松戸の樋門群^{ひもんぐん}・小山樋門橋^{こやまひもんばし}(図 59 『名勝に関する総合調査』2013 文化庁文化財部記念物課)、矢切の渡しの景観と野菊の墓文学碑(『近代遺跡調査報告書—交通・運輸・通信業—』2019 文化庁文化財第二課)、松戸貝層の3件です。



図59 小山樋門

第3節 松戸市の歴史文化の特徴

松戸市は首都東京に隣接する利便性の良さもあり、昭和30年代以降、急激に人口が増加して市街化も進みました。しかしそれ以前の近世においても、この地域は江戸近郊に位置し、政治・経済・文化など様々な面で、中心地江戸の影響を強く受け続けてきました。また中世にあっては、争乱の続く時代にあつて、在地勢力の核となっていた時期もあります。松戸市の歴史文化は、そうした固有の地理的・歴史的な環境や、変化する社会的状況のなかで次第に醸成されてきたのです。



※5色の色は P49 表5との関連性を示しています

図 60 歴史文化に関わる特徴を構成する要素の整理

図 60 は、第2章～第4章で概観した固有の要素と3つの地形類型、及び第4章の冒頭で提示した市内9地区を関連付けて関係を整理したものです。これらを踏まえ、松戸市の歴史文化を時代と地域を横断的に概観し、その特徴を以下のようにまとめました。

表 5 「松戸市の歴史文化の特徴」の整理

(1)豊かな海の記憶と水辺の暮らし

江戸川沿いの低地や谷を生業の場として営まれた暮らし。海の恵みを享受し、繁栄した縄文社会。貝塚が多く残り、縄文時代の遺跡の多さから「縄文銀座」とも称される松戸市。恵みとともにわざわい禍をもたらした「川」との共存。治水事業と新たなまちづくりの歴史。

(2)交流の広がりから高城氏の時代へ

小金や河原塚、栗山古墳群の調査成果から明らかになった広域的な政治・文化の交流のはじまり。小金城主高城氏が、地域の核として存在した時代。本土寺をはじめ、高城氏に関連する寺社が多く存在し、高城氏の繁栄を今に伝える松戸市の北部地域。

(3)宿場・河岸から街へ一人とモノの行き交う場で育まれた歴史文化―

水戸道中と小金宿・松戸宿、鮮魚街道と松戸河岸といった「人とモノの行き交う場」で育まれた歴史文化。大きな変革が進んだ時代に徳川昭武が穏やかな後半生を過ごした戸定邸。近代以降には、東京近郊という恵まれたロケーションゆえに松戸に来た学校と作家たちにより、ユニークな芸術文化が形成された。

(4)小金牧から常盤平団地へ

市域東部に広がる台地を舞台とする営み。壮大な御鹿狩、小金牧の開墾、首都近郊にあって発展した農業、ゴルフ場や飛行場の建設など、ダイナミックで多彩な変貌を遂げた地域の歴史。土地区画整理事業や団地の造成など、「街」の基盤が形成される。

(5)祈りと娯楽の系譜

穏やかな暮らしやこどもの成長を願う真摯な祈りと、祭礼や有名な社寺への参詣という遊山の歴史。地域の人々が身近に感じ、親しんできた松戸の自然とレクリエーション。今に引き継がれる「娯楽」の系譜。

(1)豊かな海の記憶と水辺の暮らし

松戸市の西部に広がる江戸川沿いの低地や、下総台地の縁辺部に見られる入り組んだ谷を舞台に、稲作や漁撈などが盛んに行われていた時代があります。

縄文の海と貝塚

およそ一万年続いた縄文時代は、温暖化による海水面の上昇(約 6,000 年前頃)と寒冷化による海岸線の後退により、海水面の高さが2mから3mも上下する、劇的に環境が変化した時代です。この時代の人々は、そうした変動を経験しながら、目の前に広がる海と周囲の林野からもたらされる自然の恵みを利用し、海沿いの地域を中心に特有の世界を作り上げました。とりわけ海への依存が強かった縄文人の営みは、やがてこの地域に多くの貝塚を残すこととなります。

縄文時代の人々は多量に貝を採取し利用していました。その殻はムラの中や周囲にまとめて投棄され貝塚を形成します。貝塚には土器や石器などの遺物のほかに、魚や獣の骨なども混じっているため、その内容を詳細に調べることで縄文人の食生活や食糧事情、さらには周囲の自然環境まで復元することができます。

松戸市では縄文時代の遺跡154か所のうち、多くの遺跡で貝塚が確認されています。縄文人が主に利用した貝類はハマグリ、マガキ、アサリ、アカニシ、イボキサゴ等です。魚類ではマアジ、スズキ、マダイ、ヒラメ、カレイ、マイワシ、カタクチイワシ、ウナギなどの骨が出土しており、これら生物の生息域の分析から、遺跡周辺は淡水が流れ込む遠浅の海であったことが分かります。獣類ではイノシシやシカをはじめイタチ、キツネ、タヌキ、ノウサギ、鳥類ではカモ、キジ、サギ等の骨や歯が検出されています。縄文のムラの周囲には、豊かな海と森が広がっていたことが分かります。

松戸市内では、江戸川沿いの低地や国分谷、それらから派生する小さな谷を臨む台地の上に多くの集落が営まれました。縄文海進がピークに達した縄文時代前期の幸田貝塚は、この時期としてはまれな大規模集落跡であり、^{せきやましき}関山式土器をはじめとする遺物は一括して重要文化財に指定されています。そのほか縄文時代中期(5,000 年前から 4,000 年前)の大規模環状集落^{かんじょう}である子和清水遺跡、海岸線が後退し始めた時期にあたる縄文後期(4,000 年前から 3,000 年前)の貝の花遺跡など、全国的にも著名な遺跡が数多くあります。これらの遺跡は、宅地化に先行して行われた発掘調査によって詳細な記録が残され、縄文土器をはじめとする出土品も市立博物館に展示されています。また幸田貝塚や東平賀遺跡などは、一部を公園にすることで遺跡そのものを保存しています。

水辺の暮らし

縄文時代に人々に海の幸をもたらした低地や谷は、寒冷化が進んで海岸線が遠退くと、やがて湧水の流れる低湿地へ変貌していきます。3世紀後半にはじまる古墳時代には、そうした低地で稲作を中心とする農耕がはじまり、谷を臨む台地の上には多くのムラが営まれるようになります。しかしこうした低湿地の開発のためには、大規模な灌漑が必要であり、しばらくは部分的な土地利用であったと思われます。

江戸川沿いの低地に関しては、稲作を営むまでにはさらに長い時間を要したようです。陸地化が進行していた時期でも、塩害や水害など、農地としての利用に適さない状況が続いていたのかもしれない。記録の上で人々の足跡が確認できるのは14世紀末か15世紀頃からで、横須賀や馬橋などの地名が『本土寺過去帳』の記述中に見られるようになります。17世紀半ばには大規模な江戸川の整備事業が進み、ようやく人々の暮らしも成り立つようになりますが、水害の不安が消えることはありませんでした。

現在の新松戸や古ヶ崎には、昭和の中頃まで水辺の環境に適応した暮らしぶりが残っていました。河川に沿う微高地上に屋敷地が選ばれ、「水塚」と称される嵩上げされた一段高い場所に蔵が建てられていました。家々には田舟が常備され、坂川や用水路を利用して収穫した稲や肥料の運搬や、人々の移動手段として用いていました。身近にある用水路や水田では、フナ、ウナギ、ドジョウ、ヌカエビ、モクズガニなど貴重なタンパク源を得るための漁場になり、一部は北千住(東京都足立区)の魚市場へも出荷されていたようです。またここで収穫されたコメの品質は高い評価を受けており、ことにもち米は白玉粉や流山のみりんの原料として重宝され、地域の産業を下支えしました。

一方下流の矢切では、18世紀初頭の大水害をきっかけに、村が高台へ移転したという伝承があり、これにより農地と住まいが別々になったと言われています。実際を上流部の地域とは家々の立地や、その後の発展の仕方に違いが生じています。明治時代になると砂州に開かれた「島畑」でネギや夏大根などが栽培され、直接東京の千住市場などへ持ち込まれるようになります。消費地に近く品質も良いことから次第に評価が高まり、さらに1911(明治44)年の葛飾橋架橋がきっかけとなって、東京の野菜供給地のひとつとして急速に発展することになりました。こうした農業生産の興隆が、やがて松戸を代表するブランド農産物の一つである矢切ねぎに結実します。

大規模な治水事業

厳しい自然環境に対して、異なる対応をした二つの地域は、昭和に入って行われた大規模な治

水事業や土地区画整理事業、JR 常磐線の新松戸駅や北総鉄道矢切駅の開設、東京外かく環状道路の開通など交通網の発達により、今日ではそれぞれに人口が増加しました。その一方で、矢切地区に広がる畑地や緑豊かな斜面林、江戸川に浮かぶ矢切の渡し舟など、松戸市民にとって心安らく懐かしい景観も残されています。

(2)交流の広がりから高城氏の時代へ

列島規模で人やモノが移動・交流する時代を迎えると、松戸市域も、やがてそうした世の中の動きに組み込まれていきます。さらに時代が下り、小金城主高城氏が登場する戦国時代には、小金を中心とした地域が支配領域の核として位置付けられることになります。

5世紀以降の松戸

農耕社会が発展して富の集積が進んだ3世紀頃には、富裕な有力者(首長)があらわれ、各地に古墳が築かれるようになります。そうした首長たちの連合が進むと、やがて中央の王権を頂点とする古代国家が成立します。

松戸市内に所在する古墳は決して多くはありませんが、考古学的な調査が実施されている古墳の立地を見ると、いずれも江戸川沿いの低地や国分谷を臨む台地の縁辺部に築造されています。

小金古墳群の小金1号墳や、栗山古墳群・^{たてだ}立出し遺跡・天神山遺跡から出土した埴輪や石材の産地には、遠く離れた地域のもが含まれています。また古墳出土の遺物ではありませんが、5世紀中葉から後半頃の集落跡である^{ぎょうにんだい}行人台遺跡からは、「^{とらいけい}渡来系遺物」と称される朝鮮半島からもたらされた可能性のある鉄製品と土器が出土しており、すでにこの地域が広い流通網の中に位置していたことを物語っています。さらに栗山古墳群は、^{ほうおうづか}法皇塚古墳(前方後円墳:市川市)をはじめとする国府台古墳群の支群と考えられており、この地域一帯がより広い政治的なまとまりに組み込まれていたことが推測されます。

ヤマト政権が集権国家を誕生させ、701(^{たいほう}大宝元)年に制定された大宝律令によって、現在の松戸市域は下総国葛飾郡となります。交通体制の整備も進められており、武蔵・下総・常陸の国府を結ぶ東海道の本道が、下総国府から(市川市国府台付近)から松戸市内を通り、手賀沼の西岸へ達していたと推定されています。この時代の市内の遺跡も、国府が置かれた市川市に寄った南部に集中する傾向が見られます。これまでに43軒以上の竪穴住居跡と5軒の掘立柱建物跡を検出した小野遺跡(胡録台)は、推定されている旧東海道のルートに近く、官人の位階を表す「^{おびかなぐ}帯金具」を出土しています。さらに坂花遺跡(紙敷)では、国府との関連を窺わせる「^{くにのくりや}國厨」の文字が^{ぼくしょ}墨書

された土器が出土しており、下総国府との関係性が推測されます。

小金城主高城氏の時代

高城氏が勢力を伸した16世紀頃は、小田原の北条氏、古河を拠点とする足利氏(古河公方)、扇谷と山内の両上杉氏、安房の里見氏と足利義明(小弓公方)など様々な勢力がせめぎ合い、関東全域が争乱の場となった時代でした。1538(天文7)年の相模台の戦いや1564(永禄7)年の国府台の戦いでは、松戸市域も戦いの舞台となっています。

高城氏の領域支配の中心となった小金は、この時代以前から多くの人々が集住しており、人や文物が往き来していた場であったと考えられています。小金城跡や根木内城跡の発掘調査では、中国から輸入された陶磁器、瀬戸・美濃地方や常滑で生産された陶磁器、周辺地域で生産されたと考えられている素焼きの土器類などが出土しており、高城氏の領域には、多様な流通網が重複していたことが分かります。

『本土寺過去帳』には、1546(天文15)年のこととして「高城下野守当地頭」の記載があり、この時期には高城氏が小金領主として認知されていたことがうかがえます。これは前述の相模台の戦いから8年後のことであり、高城氏が地盤を固めた時期が、争乱の続く最中であったことが分かります。また高城氏の一族と思われる人名の脇には地名が付記されています。これらの土地と小金の間には、当時、何らかの交通の手段があったと推測されます。例えば「横須賀」は、小金城から中世の遺跡群が所在する鱈ヶ崎(流山市)の台地へ続く微高地を中心とした地名ですが、『本土寺過去帳』には15世紀から登場します。同じく「高城周防入道悲母」や「高城和泉守内方」に付記される「我孫子」は、現在の利根川水系と「香取の海」と称される広大な内海の玄関口に位置し、河川や湖沼を利用した経済圏へのアクセスポイントであったことが知られています。

このように小金城主高城氏を中心とした世界は、長い戦乱の時代を経験しながら、一方では陸地や河川、あるいは海の道を介して多くの地域と繋がっていたことが分かります。支配領域の中核であった小金周辺には、本土寺や慶林寺、東漸寺、大勝院、広徳寺など高城氏にゆかりのある寺院が集中しており、城跡を史跡整備した大谷口歴史公園(小金城跡)や根木内歴史公園(根木内城跡)、さらには幸谷城跡や東平賀遺跡など、中世の遺跡も数多く分布しています。

(3)宿場・河岸から街へ -人とモノの行き交う場で育まれた歴史文化-

江戸時代、松戸市域には水戸道中と鮮魚街道という2つの主要な道が通じていました。また江戸・東京という政治・経済・文化の中心地に近い地の利は、近代以降も幅広く多くの人々を引き付

け、松戸の歴史文化に豊かな彩りを添えています。

松戸宿・松戸河岸と鮮魚街道(生街道)

松戸市内には、江戸時代のはじめに整備された水戸道中が南北に通じており、松戸宿と小金宿の二つの宿場がありました。江戸の日本橋から水戸への総行程は30里14町(約 119.3 km)、一般の旅行者で二泊三日、^{さんきんこうたい}参勤交代する大名家の場合には三泊四日の行程だったといえます。

松戸宿の中心は本陣や問屋場の置かれた宮前町で、街道沿いには商店や旅籠が軒を並べ、1851(嘉永4)年には戸数468軒、人口2,224人を数えるほどでした。江戸川の舟運で栄えた松戸河岸は、金町松戸関所と下横町を結ぶ往還河岸、輸送荷物を扱った納屋河岸(良庵河岸)、船宿が設けられ碇泊地として利用された平潟河岸から成っていました。これらの河岸は、1731(享保16)年に行われた江戸川の改修により適度な水深が確保され、さらに良い条件を備えることとなります。これと時を同じくして銚子で水揚げされた鮮魚や、小金牧内で生産された薪や炭の輸送量が増大したこともあり、物流の結節点としてますます活気づくようになります。重要な役割を果たしたのが鮮魚街道で、銚子から舟で利根川をさかのぼらせた荷を布佐(我孫子市)で陸上輸送に切り替え、^{とみつか}富塚(白井市)、金ヶ作(松戸市)を経て松戸河岸へ至るルートが主流とされていました。夕方に銚子を出発した荷は、翌々日の朝には日本橋の魚市場へ持ち込まれたといえます。

松戸宿から水戸道中を小金宿へ

松戸宿から水戸道中を北へ進むと、やがて馬橋の家並みを抜け、萬満寺の門前で「く」の字に折れ曲がり、ドウロクジン坂(富士見坂)を上って道標の立つ印西道との分岐点に至ります。江戸時代の後期、馬橋には小林一茶の後援者であった油屋平右衛門(大川立砂)が住んでおり、地域の俳諧の中心として活躍したことが知られています。また一茶はたびたび東葛地方を訪れ、地方の俳壇に強い刺激を与えたとされています。立砂の息子斗圍の時代には、周辺の農村にも俳句を詠む人が増え、寺社への献句額奉納や、句碑の建立が行われています。

馬橋から小金宿に至り宿内の道を北へ向かうと、^{こむそう}虚無僧の寺普化宗一月寺や、俗に「水戸御殿」と称された水戸徳川家専用の旅館が並んでいました。また中世以来の歴史を有する宿場内には、高城氏の^{せいさつ}制札を有する東漸寺もあります。幕末の騒乱期には、小金宿へ激高した水戸藩士が大挙して押し寄せ、水戸徳川家専用の旅館を中心に血なまぐさい騒動や事件の場にもなりました。

宿場内の道筋は八坂神社の手前で直角に折れ、根木内から現在の柏市へと向かいます。一方、八坂神社の角からは本土寺の参道が枝分かれし、さらにその先の関宿方面へと道が続いていま

した。

近代化が進む松戸市

江戸時代に水戸道中の宿場であった松戸と小金は、近代に入りそれぞれが町となりました。1896(明治29)年には鉄道が開通し、1911(同44)年には葛飾橋が建設されて東京へのアクセスが向上、近郊型の農業経営がますます盛んになります。江戸川を使った舟による輸送が衰退する一方、鉄道という新たな交通手段により、松戸市域は東葛地方の中核的な存在として成長を遂げるようになります。

徳川昭武の戸定邸での暮らし

幕末に将軍の代理としてパリ万博に派遣された徳川昭武は、水戸徳川家の出身で、松戸に大変ゆかりのある人物です。明治維新など大きな政治的変革のあった時代に前半生を送った昭武は、1884(明治17)年に戸定邸へ生活の場を移し、若くして隠居生活に入ります。

昭武が戸定の地を選んだ理由は明確ではありませんが、公的な機能を持つ小梅邸(現在の東京都墨田区向島、当時の東京市本所区向島小梅町にあった本邸)とは異なる、寛いだ私的な生活の場であったことは明らかです。ここでの日々は、狩猟や川釣り、写真撮影、陶芸、自転車、旅行など多彩な趣味を、兄の徳川慶喜よしのぶや多くの友人たちと共に楽しむ穏やかで豊かな暮らしでした。

昭武が後半生を過ごした戸定邸は、明治時代の徳川家の住まいがほぼ完全に残る稀有な建物です。昭武自ら設計や樹木選定などに関わった庭園は、洋風技法によって張られた芝生面と、その周囲にコウヤマキとアオギリの木立が連なる作例は、現存最古とされています。また国指定名勝の庭園と重要文化財の邸宅に加え、昭武が撮影した写真や製作した陶器類、別邸での生活を記した文書類、パリ万博関係の記念品などは、一括して市の指定文化財となっています。

首都圏に形成されたユニークな芸術文化

近代以降、東京近郊というロケーションゆえの利便性と将来性から、いくつかの学校が松戸に設置され、直接間接に芸術と関わってきました。また、松戸に來た作家たちは、これらの学校と関わり、また松戸の風土ひに惹かれながら、ユニークな芸術文化をかたちづくってきました。

千葉県立高等園芸専門学校創立から3年後の1912(明治45)年、千葉県庁舎落成記念に開催された千葉県共進会に同校が出品した「室内花壇」を、洋画家の堀江正章ほりえまさあきが描いています。『室内草花図』と名付けられたこの作品は、彼の代表作として東京藝術大学大学美術館に収蔵さ

れています。

1914(大正3)年から1942(昭和17)年までは、東京美術学校(現東京藝術大学)西洋画科の第一期生で白馬会に参加した洋画家の田中寅三たなかとらぞうが園芸学校で図画を教えました。彼は指導の傍ら構内の庭園や植物、学校近辺の風景を描いています。

かつて構内にあった牡丹園は東京近郊で第一とされる牡丹の名所で、画家たちが写生に訪れました。また歌人の与謝野寛よきのひろし・晶子夫妻が1924(大正13)年にこの牡丹園を訪れ、晶子が60首もの短歌を詠んだことは広く知られています。

子どもの頃に松戸に転入した洋画家の板倉鼎いたくらかなえも、東京美術学校在学中に園芸学校のフランス式庭園や温室を描いています。彼は美術学校卒業後、妻の須美子すみことともにパリに留学しました。須美子もパリで油絵を始め、ふたりの才能は異国の地で開花しますが、鼎は1929(昭和4)年に急病のため28歳の若さで客死し、須美子も帰国後、鎌倉の実家に戻ってから1934(同9)年に25歳で病没しました。

1919(大正8)年には、陸軍工兵学校が岩瀬に創設されました。同校に展示されていた彫刻家の日名子実三ひなこじつぞうによるレリーフ『坑道掘進作業』(1943)は、現在では自衛隊勝田駐屯地の防衛館に展示されています。

1945(昭和20)年の終戦による陸軍の解体に伴って閉校した同校の校舎に、東京大空襲で校舎を焼失した旧東京高等工芸学校(現千葉大学工学部)が移転してきました。この学校は1921(大正10)年東京・芝浦に創設され、先駆的なデザイン教育によって剣持勇や大橋正など多くの優れた人材を輩出し、日本のデザインの発展に大きな役割を果たしました。移転後、大学昇格運動、改称改組などを経て(p36~37参照)、千葉市に移転するまでの約20年間、デザインも学べるユニークな工学部として、高等工芸時代から続くデザイン教育を松戸で行いました。

一方、戦後も多くの作家が松戸に来て終の棲家を構え、作家活動を行いました。洋画家の原安はらやす佑すけ(昭和21年~)、長田国夫ながたくにお(同31年~)、山川輝夫やまかわてるお(同50年~)、版画家の奥山儀八郎おくやまぎはちろう(同29年~)、陶芸家の宮之原謙みやのほらけん(同23年~)、彫刻家の郡司和男ぐんじかずお(同36年~)、写真家の及川修次おいかわしゅうじ(同44年~)らです。

1964(昭和39)年に松戸に来た日本画家の丸木位里まるきいり・洋画家の俊夫妻としは、当時発掘調査が行われていた貝の花貝塚に関心を寄せ、その保存運動に尽力しました(p46参照)。また八ヶ崎の自宅近くに原爆の図美術館の開設を画策しましたが、土地を取得できなかったために断念し、1966(同41)年に転出しました。

明治20年代以来、東京藝術大学(旧東京美術学校)のある上野と松戸は常磐線で結ばれてい

ますが、1991(平成3)年、取手市に同大の取手キャンパスが開設されてからは、上野と取手の中間に位置する松戸市は同大の関係者にとって一層利便性の良い街となっています。市内にはほかに多くの作家が住み、現在も多様な創作活動が行われています。

(4)小金牧から常盤平団地へ

小金牧の一部である小金原・五香地区は、小金牧の開墾事業以降、ゴルフ場や飛行場の建設など、時代の変転に伴う大規模かつ多様な変化を重ねることになります。そして昭和30年代にはじまる急激な人口増加を背景に、常盤平団地に象徴される住宅地へと変貌を遂げ、現在の「緑豊かな街」が形成されることとなります。

小金牧と御鹿狩

江戸時代、松戸市の東部は幕府が経営する小金牧に含まれており、ここで捕獲された野馬^{のま}は武士の騎乗用に、また農耕や運送に利用されました。牧の範囲は新田開発により次第に狭くなりますが、金ヶ作役所^{のまぶぎょうわたぬき}や野馬奉行綿貫氏の役宅が設けられるなど、当時の松戸市域は小金牧経営の中心地であり続けました。

牧には野馬の逃亡防止と保護のために野馬除土手^{のまよけどて}が設けられていましたが、しばしば野馬が里へ入り込むことがありました。そのため周囲の村々は作物への被害に加え、野馬除土手の修繕、野馬捕り^{のまど}の際の人足提供など負担は大きかったようです。後には逃亡を防ぐ緩衝地帯として植林や採草地の確保が認められ、野馬にとっては飼料の供給地と猛暑・厳寒期の避難場所、農民にとっては肥料と薪や炭を採取する場所となりました。小金牧や佐倉牧で生産した櫛^{くぬぎ}の炭は、やがて佐倉炭という商品名で江戸市中に知られるようになります。

小金牧では徳川将軍により御鹿狩^{おしがり}が4度行われています。牧内の害獣駆除と幕臣達の軍事訓練を目的として、周辺の村々から大勢の百姓^{せこ}勢子を動員して催されました。将軍の観覧所となる「御立場^{おたつば}」は、現在の五香公園付近に築造され、ここを中心に壮大なスケールの御鹿狩が行われました。市指定有形文化財の「寛政七年小金原御鹿狩絵図」には、11代将軍家斉が行った御鹿狩の様子が描かれており、その大きさを知ることができます。

五香六実の開墾と大規模な開発の歴史

明治時代になると新政府は、困窮^{こんきゆう}する江戸の町人や武士を救済するため、小金牧^{かいこん}の開墾に着手します。当初は開墾会社に事業を請負わせますが、入植者の多くが農作業に慣れていなかった

ことや、災害が重なったこともあって会社は解散、多くの入植者が脱落してしまいます。その後は、周辺の村落から開墾に入る人が増えるのですが、土地がやせており、小作農の比率も高く、開墾地での暮らしは苦しかったようです。これらの畑地では大麦、小麦、^{おかぼ}陸稻などが栽培されていました。県道が整備され、1923(大正12)年に北総鉄道(北総開発鉄道ではなく現在の東武鉄道)が開通すると、この地域は東京近郊の野菜類の供給地として発展することになります。昭和初期の六実駅の取り扱い荷物は、野菜類やサツマイモ、麦などの雑穀、木材が多く、特にサツマイモは開墾地の名産品でした。また五香六実地区での梨栽培もこの頃から始まったといわれています。

松戸市域での梨栽培は江戸時代の後期にさかのぼります。幕末頃には江戸の市場でも有名になっており、明治以降は作付面積が急増します。1898(明治31)年に画期的な新品種^{にじっせいきなし}「二十世紀梨」が誕生しました。

大正の末年頃から新たな土地利用が進められ、1926(大正15)年には現在の高柳と六高台の約50haの土地に、武蔵野カンツリー倶楽部六実ゴルフ場がオープンします。

1940(昭和15)年には串崎新田や五香六実の約130haの畑地と山林が切り開かれ、^{ていしんしょう}通信省航空局中央航空機乗員養成所が建設されました。これらの施設は、太平洋戦争末期に、首都の防空を担う陸軍航空隊の基地として使用されることになり、御鹿狩の御立場跡も造成工事によって削平されてしまいます。

松戸市東部の地域は、戦後の昭和30年代末頃から、松戸市における工業発展の一翼を担う松飛台工業団地として、あるいは住宅団地の先駆けといえる北丘団地の造成や、松戸市が全国トップクラスの施行率を誇る土地区画整理事業の推進により急速に市街化されていきます。また稔台から日暮に及ぶ陸軍工兵学校の広大な八柱演習場も、戦後に開拓され、稔台工業団地や住宅地に姿を変えています。

新しいライフスタイルと常盤平団地

1960(昭和35)年に入居が始まった常盤平団地は、江戸時代に誕生した金ヶ作村の広大な土地を造成して建設されました。この団地は「現代日本人の住環境のモデルケース」といえるほど、重要な文化現象としての意味を持っていました。後に「日本の道100選」に選ばれる常盤平のさくら通りや「新日本街路樹100景」のけやき通りも、団地造成に伴い植樹されたものです。先行して開業した新京成電鉄の常盤平駅と五香駅に近い利便性や、新しい時代の生活様式を取り入れた良質の住まいを提供したことで多くの入居者を迎えます。このようにかつて林野の広がっていた台地上の地域は、昭和30年代の末頃から宅地化が進められて松戸市の急激な人口増加の受け

皿となりました。周辺地域の古い民家の典型である旧齋藤家住宅と、当時の新しい生活を体現している常盤平団地は、ともに時代の動向を反映しながらも好対照をなす「住空間」であり、松戸市発展の象徴ともいえる存在です。また常盤平団地は、2021(令和 3)年、公益財団法人都市緑化機構の推進する「SEGES」(緑の取り組みを評価する認定制度)の「そだてる緑」部門の認定を受けました。生活空間の身近にある緑地や街路樹の優良な保全、創出のための取組が評価されたものです。

(5) 祈りと娯楽の系譜

人々は日々の営みや一生の節目に、世の中の平安、自身や家族の健康などを願って神仏へ祈りを捧げてきました。例えば、近年まで年に一度、根本の富士講である清水講^{しみずこう}では富士山への登拝を行っていました。その登拝の衣装である行衣^{ぎょうい}は人生最後の衣装である死装束にも使われ、故人の富士山への信仰が大切にされてきました。そうした祈りのほか、「楽しみ」も人生を豊かにするためには不可欠のものです。一例として千葉県指定文化財である万作踊りの稽古は、農作業と家事を終えた農村の女性が忙しい日常生活のなかで夜半に楽しみとして行っていたものでした。地域に住む人々が祈り、かつ楽しみとしてきた対象に着目し、その移り変わりを辿りながら、これまでと違った切り口で松戸らしさを見直します。

さんびきししまい まんさくおど 三匹獅子舞と万作踊り

和名ケ谷の日枝神社、上本郷の明治神社と風早神社、大橋の胡籙神社^{ころく}に伝わる三匹獅子舞(市指定文化財)は、それぞれ9月～10月の祭礼日に五穀豊穰^{ごこくほうじょう}を祝って奉納されています。これらの獅子舞は、オスの獅子役2人、メス役1人からなる「一人立ち」の三匹獅子舞で、これに猿1人、笛数人などで構成されています。いずれも伝来は不明ですが、和名ケ谷と上本郷は10ないし11の演目から構成されており、両者の関係性をうかがわせる伝承が残されています。大橋の場合は獅子舞に唄が加わり、馬や社殿をほめる内容の曲などもあります。また衣装に工夫を加え、猿が観客を煽^{あお}るような振る舞いをするなど、「見せること」を意識した内容になっています。

千葉県の指定文化財である万作踊りは、地域の人々の楽しみとして伝承されてきました。松戸の万作踊りには1人から数人で踊る「清すみ」、「木更津」、「新川」などや、芝居もどきの演目「越後評判^{えちごひょうばん}」がありました。万作踊りは、土地によっては豊年万作^{あめやおど}や飴屋踊りとも呼ばれている芸能で、もとは飴売りをして歩いた人達の踊りが村々で受け入れられ広まったものといわれています。万作踊りを伝えたのは、もともと芸事の好きな農民たちであり、地域で催される祝い事などの場で演

じられ、観客もまた多くは地域の人々でした。

「参詣」という娯楽

江戸時代には、信仰とレジャーが一体化した行為が盛んに行われたようです。市内の寺社に建立されている石造物について詳しく調べると、成田山新勝寺や山形の月山・湯殿山、香川の金刀比羅神社やお伊勢参り、あるいは各地の札所めぐりなどを祈念して造立されたものが数多く見出されます。遠隔地にある寺社への参拝と石碑造立は、昭和の初期まで盛んに行われていました。また富士山への参拝も盛んに行われていました。小高い丘の上に本殿が建つ小山の浅間神社や竹ヶ花の雷電神社では、登山道を模して参道が整備されており、富士登拝を疑似体験することができるようになっています。

市内の寺院や神社の境内には、既婚の女性たちが、子授けや我が子の健やかな成長を願って建てられた石造物も数多く見ることができます。十九夜塔や二十三夜塔、念仏塔などと称されるもので、地域の女性たちが集落のお堂などに集まり、お籠りをして神仏に祈りを捧げたことを祈念して建立されたものです。こうした女性たちの真摯な祈りの場は、時代が移り替わりやがて乳幼児の死亡率が低減すると、次第に女性たちの社交の場、娯楽の場へと性格が変化していきました。

近代の娯楽

1919(大正8)年に陸軍工兵学校が設けられる以前、相模台には松戸競馬場が開設され、春秋の二度、競馬会が開催されていました。営業していた期間は短いものの、運営の母体となった公益法人松戸競馬倶楽部は、後に中山競馬倶楽部と改称、現在の JRA 中山競馬場へ発展的に受け継がれています。また現在では全く痕跡も残っていませんが、かつて小金牧の一面を占めていた高柳から六高台の約50ha の土地には、武蔵野カンツリー倶楽部により本格的なゴルフコースが設けられていました。これも戦前の僅かな期間の開業ではありますが、皇族をはじめとする名士がメンバーに名を連ねており、そのことがゴルフ場へ通じる道路整備を早めたと言われています。

身近な憩いの場

行楽や遊山の楽しみは現代にも引き継がれています。本土寺(平賀)のアジサイや紅葉、矢切の渡しとその周辺の景観、常盤平のさくら通りで開催されるさくらまつりなど、コロナ禍以前には市内外からも多くの人々が訪れ、賑わいを見せていました。谷津と里山の自然を活かした21世紀の

森と広場、鶉や鴨が遊ぶ坂川沿いの風景、東漸寺(小金)のシダレザクラ、戸定が丘歴史公園、特徴的な石材店の建物が並ぶ参道と緑濃い八柱霊園なども、市民が身近に楽しめる景観や場所として挙げるすることができます。また入居開始から半世紀以上が経過している常盤平団地は、緑地に植栽されている樹木やけやき通りなどの街路樹が、建物を凌ぐほどの高さまで大きく育ち、全体が特色ある景観を呈しています。こうした景観の多くは、自然と人々の営みの関りを通じて形成されてきたものであり、大切に次の世代へ継承すべき松戸の魅力ある財産であると考えています。